

情報の記録・保持・再認における色と形の効果に関する研究

—短期記憶における高齢者と若者の比較実験—

○佐藤昌子*, 細野友香*, 下中智美*, 渡会吉昭 (*大阪市大生科)

《目的》 来るべき高齢化, 情報化社会においては, 生活者自身が情報の入手と発信を効率よく行う必要がある. 側頭葉や前頭葉の活動低下が起こりやすい高齢者にとっては, 短期記憶情報の記憶保持が重要な課題である. そこで, 「カード提示・記録・記録内容の保持・再認」をタスクとする被験者実験を行い, 短期記憶における色と形の効果について加齢の影響を検討した.

《方法》 6つの形(○, △, □, ◇, ☆, ○)にそれぞれ6つの色(赤, 黄, 緑, 青, 白, 黒)の色紙を貼った計36枚のカードを用い「刺激提示20秒・待機60秒・記録内容の再認提示」のタイムスケジュールにより6枚のカードに対する短期記憶実験を行った. 被験者は健常高齢者男性7名, 女性18名(平均年齢61.6歳), 健常若者男性13名, 女性12名(同21.9歳), および脳梗塞により右脳の前頭葉と側頭葉部に後遺障害のある60歳の男性1名である.

《結果》 若者の正解率は高く(平均84.3%), ほとんどが記録時に提示内容を規則化处理し, その被験者群では正解率92.1%であった. 正解率に色と形の影響は認められなかった. 高齢者群の正解率(平均36.4%)が低い理由として, 提示内容をそのままの画像として記録する傾向があり, さらに記録内容の保持能力の低下が考えられた. 障害被験者の成績は健常高齢者の平均値よりもやや高かった. 高齢者にとって記憶しやすい色と形の組み合わせがあり, ○は赤, 白, 黒, △は黒と黄, □は赤, ☆は緑で正解率が高かった.